

## 文化学習導入による生徒の意識変容に関する研究

— 高校での実践を中心に —

広島県立賀茂北高等学校 上西幸治

### 1. はじめに

近年、日本における外国語教育（とりわけ、英語教育）は文部省の学習指導要領の改訂と共に、その教育内容、実践、教師の英語教育に対する姿勢等々、大きな変化を迫られつつある時期が到来したといえる。指導要領の目標を見てみると、その特徴の一つには、コミュニケーション能力の養成を目指すこと、つまり以前に比べて学習者の話す力・聞く力の育成に力点が置かれていることが挙げられる。ある意味で、その点に力点が置かれすぎているがために、第二の点である「言語・文化に対する関心を高め、国際理解を深める」という点について、目標の意義が薄れていると言わざるをえない。高校の学習者を見るに、英語学習に引きつけられている学習者は多くはない。そこで、学習者を英語学習に引きつけ、学習意欲を高める一方策として、文化に焦点を当てて授業実践を試みた。

高等学校の教師に関する意識調査でも、英語によるコミュニケーション能力の育成と共に、異文化理解の指導に重点を置くべきだという考えがかなりの割合を占めていることが記述されている（古川 1993）。多くの研究者や教育者がその重要性を強調しており（Rivers 1981, Smith 1981, Tuttle 1979 他）、しかも授業実践においても幾多の報告が行われている（Klayman 1976, Lewald 1974, 工藤 1994, 坂本 1993, 深澤 1994 他）。しかし、外国語（英語）授業への文化学習導入の方法論や教材内容に関する実証的研究は少ないのが現実である。

本研究では、その第一歩として、広島大学英語教育研究会(1989)<sup>1</sup>および羽鳥・松畑(1980)<sup>2</sup>の研究を参照しながら、アンケート調査を行った。その結果をもとに、実際に英語授業に文化学習を導入し、調査・研究を行った。特に、実際に導入した題材から見た学習者の関心度及び学習意欲度に焦点を当てて、実証的に考察を試みた。

### 2. 文化学習（異文化理解）の意義

過去の様々な文化教授（異文化理解）研究者及び教育者による研究・実践の意義を大きく大別すると、以下のように考えると考える。

- 1) ATTITUDINAL ASPECT（学習志向的側面）
- 2) COMMUNI-CULTURAL ASPECT（意志疎通のための文化的側面）
- 3) HUMAN- EDUCATIONAL ASPECT（人間教育的側面）

1) ATTITUDINAL ASPECTは、文化学習（教授）の位置づけとしてはきわめて近視眼的な立場であり、文化教授が学習者が喪失している英語への興味・関心を沸き立たせ、英語に目を向けさせていく一つの方法としてとらえる側面である（北尾 1979, 服部 1987, 松本 1987）。英語教育において、言語学的知識の側面が強調されるあまり、かなり多くの生徒が英語嫌いを引き起こしたり、途中で英語の学習を放棄してしまうという現状がある。この状況を打破するためにも、文化学習の動機づけ的な側面が必要と感ずる。そのためには、文化を学習することの意味を文化的事物（realia）や具体的な写真・事例等を提示しながら理解させ、考えさせ、更なる学習の円滑化が図れるように学習者に促す必要がある。

- 2) COMMUNI-CULTURAL ASPECTは、いわゆる Interpersonal Communication（個人間のコミュニケーション

ン)に必要な文化的側面のことである。言語面で言えば、英語という言語を通じてのコミュニケーションに必要な文化的側面、つまり社会言語学的側面(sociolinguistics/pragmatics)のアプローチが含まれ(深澤 1994, 吉田 1992, 1995)、非言語的側面では、Nonverbal Communicationの文化的側面が範疇に入ると言える。かつての日本の英語教育において欠落していたと言っても過言でない分野である。この分野の研究は、多くの研究者によって行われている。例えば、Cohen & Olshtain (1981)の謝罪・詫び(apologies)、Blum-Kulka & Olshtain (1987)の依頼・謝罪(requests and apologies)、Beebe et al. (1990)の拒否(refusal)、Wolfson(1981)の賞賛(compliments)の研究などがある。Ellis (1991), 深澤 (1994)によれば、社会言語学的諸研究の結果から、日本人話者には沈黙の多用・言葉の曖昧性・受け身的(非積極性)などのような特徴がある。この様な日本人の特徴を英語の話者のものと比較しながら、学習者に認識させ、国際的な世界と言われる今、それに対応できる将来的な人材育成のためにも、この分野の英語教育への貢献は大きいものがあると言わざるをえない。

3) HUMAN-EDUCATIONAL ASPECTは、より広い範疇のこと、つまりグローバルな視野に立ち、人間相互の理解や尊重の精神含む人間教育的視点から見たものである(Kerl 1994, Politzer 1959, Wallach 1973, 岡部 1992, 久保田 1988, 除川 1992, 和田 1990 他)。文化学習は異文化との接触や異文化を鏡にしながらか自己確認する側面をもっている(荒木 1994, Kramer 1994)。すなわち、端的に言って、他の教科との関連があり、英語だけでなく他の教科においても指導している分野である。例えば、環境問題、民族問題などに関する教育は、公民などの教科でも教授可能な分野であるから、HUMAN-EDUCATIONAL ASPECTの範疇に入る。伊原(1988)は、他教科との共通性に関してグローバルな視点から以下の様に述べている。

各教科を通じて、平和・平等・人権・自由・国際協調といった目標のもとに国民教育を組み立てている。民族・国家も内外を問わず、人間が自由であり、世界が平和であるためには、まず自分と異なるものへの対応が問題となる。すなわち、自分とは異なる風俗・習慣・思考形態といった異文化を互いに知り合い、認め合い、尊重し合う営みを出発点としなければならない。

以上、3つの視点から文化学習の意義について論じてきたが、この区分は大別はあくまで便宜上行ったものであるが故、厳密に3つに分けられるものではなく、お互いに重複し合って、文化の学習(異文化理解)が推進されているという事実があることは認めざるをえない。

### 3.1 研究目的

本研究では、第1の点(Attitudinal Aspect)に関して記述してみたい。この学習志向的側面というのは、学習者が言語学習により興味・関心を抱き、学習の楽しさを理解し、文化学習を通じて言語の勉強に取り組んでいくことを容易にする上で意味があるものだと考える。それ故、学習志向的側面というのは、いわゆる外国語教育の初歩的段階への導入と考えるべきものと言える。

前章で論述してきたように、過去の先行研究において文化学習が外国語学習意識の向上に有効であることが提唱されている。しかしながら、授業実践を通しての文化学習に関わる実証的なデータを見るまでには至っていない。その点を重視し今回の研究に至っている。その事実を踏まえながら、実際に文化学習を継続的にクラスに導入し、授業を通して彼等の英語学習に対する意識がどう変わるかを探求・把握することが本研究の主たる目的となる。具体的な本研究の目的としては以下の項目があげられる。

1. 文化学習に関する学習者の意識調査
2. 授業実践を通しての学習者の意識調査

その詳細な内容に関しては次章で記述する。

### 3.2 研究方法

#### (1) アンケート調査

先の羽鳥・松畑(1980)の研究を踏まえ、以下の項目に関係するアンケートを作成し、それを学習者に課し

て集計し分析するという方法で調査を行った。すでに高校段階においては、一つのクラスの中に英語に対する様々な思い・意識を抱いている学習者がいる。その打開策的な方法として、北尾(1979)も記述しているように、学習者に英語に対する意識の転換、あるいは英語学習に関心を抱かせる方法として、文化学習の導入を考えた。

とりわけ、好き・嫌いグループの中で文化学習等に対する意識の差があるかどうかに関心を当ててみたい。先行研究でも記述されているように、すでに外国語学習が好きな学習者は、学習意欲が旺盛で、自分の将来や国際社会等も念頭に置いていることが多いと言える(広島大学教育学部英語教育研究会1989)。英語が好きな学習者ばかりでなく、学力不振等様々な要因で英語学習が嫌いになっている学習者が、文化学習の意義を思いださうかどうかを調査したい。

- 1) 調査期日 1995年9月下旬
- 2) 対象者 広島の県立高校2年生152名(男82名、女70名)
- 3) 調査方法 5段階尺度によるアンケート調査
- 4) 主な調査項目(Appendix 1)
  - A. 英語の勉強(学習)が好き・嫌い。
  - B. 英語の勉強は将来役に立つと思っているどうか。
  - C. 英語授業の中でアメリカ・イギリスの風習、生活習慣など異なる文化に関する学習志向。
  - D. 英語授業の中で近隣のアジア諸国の風習・生活習慣など異なる文化に関する学習志向。
  - E. 外国の文化を学習したこと、あるいは学習することは将来自分に役立つと思っているかどうか。

英語が好きな学習者、嫌いな学習者に焦点を当て、彼等が他の項目に関してどのように意識をしているか。その相関を調査した。つまり、英語の好き・嫌い(A)と右(B)の各項目との相関を調べた。

A	B
英語の好き・嫌い	英語が役に立つこと
	文化学習が役に立つこと
	アメリカ・イギリスの文化の学習志向
	アジア諸国の文化の学習志向

## (2) 授業実践を通じた意識調査

中学校・高校における異文化教材の扱いには、題材(Topics)に関するもの(外在的文化教材)と言語材料に関するもの(内在的文化教材)という2つの視点がある(伊藤1992、除川1992、森1984)。本研究では文化学習に関する題材を中心に導入してみた。その題材を英語授業の中に位置づける方法としては、大きく2つの方法がある。一つは授業1時間の中で10分ないし15分くらいの時間を「投げ入れ」として、その学習に当てる方法で、もう一つは、1時間の授業を全てその文化学習を目的にした授業を展開するものである(和田1996)。教科書は教科書として扱う必要があるが故、私の意図する文化教材を導入するために、前者の方法(授業の中で時間を割く)をとった。但し、単発的な「投げ入れ」教材としてではなく、毎時間文化学習を試行するという継続的な文化教材の導入をする方法を採用した。継続的な実践によって、学習者はよりその影響を受けやすく、彼等の英語学習に対する意識がどのように変容をしていくかを考察することがより可能となると考えたからである。今回はその中間報告であるので、導入した教材内容やそれに対する生徒の関心度等を紹介する。

- 1) 実施期間 1996年4月~7月
- 2) 実施クラス 広島の県立高校1年生(男15名 女20名)
- 3) 実施方法 授業開始時、約15分間

### 3.3 研究結果と考察

#### (1) アンケート調査

上述したアンケート調査を実施し、その結果をまとめると以下の通りになった。

#### (A) 英語の好き・嫌いと言語が役に立つかどうかとの相関

	役立つ	役立たない	計
英語が好き(51)	48	0	48
英語が嫌い(56)	30	14	44
計	78	14	92

$df=1$   
 $\chi^2=18.014$   
 $** p < 0.01$

英語学習の好き・嫌いは、英語が役に立つかどうかに対する意識とは有意差があった。このことは、好きな生徒は役に立つと思っているが、嫌いな生徒は英語学習は役に立たないと思っている傾向を示している。この傾向の意味するものは、英語の必要性についての認識の違いとか、割と簡単には英語を使う仕事には就かないから役に立たない、外国人との接触がないからというものである。

<役立つ主な理由(生徒の自由記述より)>

- 国際社会だから必要 52人
- 外国へ行く時コミュニケーションできる 36人
- 英語の仕事に就く 11人
- 世界の共通語 7人

#### (B) 英語の好き・嫌いと言語文化学習が役に立つかどうかとの相関

	役立つ	役立たない	計
英語が好き(51)	43	1	44
英語が嫌い(56)	34	0	34
計	77	1	78

$df=1$   
 $\chi^2=0.783$   
*n.s.*

英語学習の好き・嫌いは、文化学習が役に立つかどうかとは有意差はなかった。英語が好きで生徒同様、嫌いな生徒も文化学習は役に立つという意識を持っている。つまり文化学習の意義は生徒の中では十分に認められていると言える。今後、学習者が社会へ出たときに、国際化時代にあつて(生徒のアンケートでは52名がこのことに触れる)、外国人と何らかの接触を持つ可能性が高いわけであるから、その場面で異なる文化の人との接触がスムーズにいくか否かは、いかに相手の文化を理解し、行動できるかにかかっているとんでも過言ではないであろう。それ故、英語を運用する力はさることながら、異文化の学習も十分必要だと生徒自身感じていると言える。

<役立つ主な理由(生徒の自由記述より)>

- 外国人との関係が良好になる(うまく対応できる) 54人
- 海外旅行に便利 30人
- 世界協力の必要性 10人

#### (C) 英語が好き・嫌いと言語文化学習意向との相関

	学びたい	学びたくない	計
英語が好き(51)	42	0	42
英語が嫌い(56)	33	3	36
計	75	3	78

$df=1$   
 $\chi^2=3.64$   
*n.s.*

英語学習の好き・嫌いは、アメリカ・イギリスの文化を学びたいかどうかとは有意差はなかった。英語が好きな生徒ばかりでなく、嫌いな生徒もアメリカ・イギリスの文化について学習したいという気持ちを抱いている言える。外国（アメリカ・イギリス）の文化を積極的に学びたいという生徒は、好きな生徒・嫌いな生徒に関係なく全体の約半数存在していた（学びたくないという生徒はわずか3人）。このことは上記の文化学習の有効性とも関連することだが、生徒自身英語の学習は単なる技能を身につけるだけではなく、文化的側面の学習も大いに必要だと感じていることになる。

<学びたい主な理由（生徒の自由記述より）>

- 文化の違い等の知識 29人
- 興味がある 24人
- 行ってみたい 9人

(D)英語の好き・嫌い とアジアの文化学習意向との相関

	学びたい	学びたくない	計
英語が好き(51)	23	10	33
英語が嫌い(56)	29	9	38
計	52	19	71

df=1  
 $\chi^2=0.395$   
 n.s.

英語学習の好き・嫌い とアジアの文化学習を希望するかどうかには有意差はなかった。つまり、英語が好きな生徒も嫌いな生徒も同じようにアジアの文化の学習に関しては、英米の文化学習の希望に比べて、極めて消極的な側面をこのデータが示している。その理由としては、生徒の意識の中に、アジアの文化学習と英語学習との関連性が希薄であるという考えが学習者の中にあることが挙げられる。確かに、アジアの文化学習は地歴・公民等の教科の中でも学習できるものであろう。生徒の意識ははまだ英米文化中心を脱していないと言えよう。

上述したことから、以下のことが言える。

- 1) 英語の嫌いな学習者は好きな学習者に比べ、英語学習の有効性には疑問を抱いている。
- 2) 英語が好き・嫌いに関係なく、文化学習は役に立つと思っている。
- 3) 学習者は依然英米文化中心である。

結局、私の実施したアンケート結果に基づけば、英語の授業の中で、文化に関する題材を用いて、実践していくことの意義を学習者自身十分認識していると言える。そのことを踏まえ、教師自身が日常の授業の中で、文化的要素を取り入れた題材の導入及び工夫が大いに必要であると考え。そこで、次節で記述する授業実践の中で文化的題材の導入を試行した。

(2) 文化学習導入の授業実践

前章で記述したように、授業の中で時間を割いて文化に関する題材を持ち込み、生徒の英語学習への意識高揚を目的として学習させた。毎時間授業の最初、約10分間、文化に関する様々な内容を提示し、生徒の英語学習への意識がどのように変容していくかを模索する試みを行った。

今回は授業実践の具体的内容と方法、及びその題材に関する生徒のアンケート結果などを中心にして報告する。

(A)教材の内容

Robinson (1985) は、文化のカテゴリーを以下のように Products, Behaviors, and Ideas の3つに区分している。

- ① Products --- literature, folklore, art, music, artefacts
- ② Behaviors --- customs, habits, dress, foods, leisure
- ③ Ideas --- beliefs, values, institutions

本研究で、私が実践した文化学習の具体的題材は以下の通りである。

ジェスチャー・ハウスツアー・母の日・デートの習慣・ラッシュアワー（身体接触）  
日本人旅行者・パーティー・動物の鳴き声・写真・給食・色彩感覚（虹）  
マンガ（個人的質問）・ほめ言葉・謝罪（I'm sorry）・先輩、後輩・お土産（toys）  
アメリカンドリーム・トイレ

上記の実践項目はRobinson が区分するBehaviors を中心にして、Ideas を取り込んだ内容となっている。Behaviors は目に見える文化(overt culture)、Ideas は目に見えない文化 (covert culture)とも言える(鈴木 1973)が、Ideas が価値観等を含むが故、分類が難しく内容的に重複する題材も出てくる。

#### (B)導入方法

授業の最初の時間、約15分間をその時間に当てた。一方的な説明に極力ならないように、生徒とのInteraction を大切にするように努めた。そのために、英語を通して何らかのコミュニケーションを生徒と教師との間で図りながら、文化学習導入を試みた。そのプロセスは短い時間であるが故、次の手順をベースにした。

(1)Thinking (2)Interaction (3)Understanding cf. マンガの話 (Procedure: Appendix 2)

#### (C)アンケート調査

毎時間、授業の最後にアンケート調査を実施し、その日導入した文化的題材が興味深いものであるか等に関する生徒の意識を調査した (Appendix 3)。各題材ごとに、生徒自身が感じたその興味深さの程度と英語学習への意欲度を集計した。それを興味深さ及び学習への影響の high と生徒自身が考えた順に列挙すると以下の通りである (Table 1)。

これまで実践した学習内容に基づいて、題材に対する関心度に関して考察すると以下のことが言える。

- 1) 日常生活に関連性のある具体的題材を扱うことの有効性
- 2) 比較文化的視点の有効性
- 3) 教師の提示方法による影響の大きさ

一般的傾向として、学習者は日常生活に関連性のあるものや視覚に訴えるものにより興味を引いており、学習意欲も高まると感じている。12番目の「School Lunch」までは半数以上の生徒が興味深いと答えている (Table 1)。

例えば、言葉の持つ意味合いに関わる「Apology」は関心度も学習志向度も上位に位置した (Table 1)。その内容とともに提示方法による影響も大きかったのではないかと思う。つまり、黒板に状況設定の絵を書きながら、英語で説明した後、日本語も使って日米比較の提示を行ったことが生徒自身の驚きや感動を導き、関心へと繋がったのではないかと考える。

題材を扱う際に、比較文化的視点が有効であることはすでに記述されてきている (Politzer 1959、井出 1972、大谷 1990、中村 1977、西田 1990)。実践した授業の中では、(1)Thinking (2)Interaction のなかで比較文化的視点を考慮した導入を行ってきた。学習者に自国の文化とtarget culture の対比をさせ、思考させることで理解が深まり、今後の学習にも有用であると考えたからである。この視点に関しての生徒の反応は敏感で、自由記述の中でも「相手の文化のことを知って楽しい」とか「もっと文化について学習したい」などといった反応があった。

題材による学習意欲の変容に関しては、興味深さと異なり、英語に関わる意識が強くないと生徒は英語に意欲的になるとは思っていないようだ。その典型的な例が、「トイレ」という題材である。これは関心度では1番目であるにもかかわらず、学習意欲度では8番目に位置している。この理由は、これを提示する際に、私の

<Table 1> (5段階尺度による調査)

Interesting Topics Avg.			Motivational Topics Avg.		
1	Toilet	4.06	1	Animal Cries	3.52
2	Animal Cries	3.94	1	Party	3.52
3	Party	3.9	3	Senior/Junior	3.38
4	Apology	3.77	4	Rainbow	3.37
5	House Tour	3.72	5	Apology	3.35
6	Rainbow	3.69	5	Souvenirs	3.35
7	Souvenirs	3.68	5	Cartoon	3.33
8	Cartoon	3.59	8	Toilet	3.3
9	Compliments	3.58	9	House Tour	3.25
10	Pictures	3.5	10	Compliments	3.22
11	Japanese Tourists	3.46	11	Dating	3.18
12	School Lunch	3.4	12	American Dream	3.17
13	Senior/Junior	3.38	12	Contact	3.15
13	Dating	3.38	14	Pictures	3.12
15	Gesture	3.36	15	Japanese Tourists	3.11
16	Contact	3.33	16	Gesture	3.09
17	American Dream	3.27	17	School Lunch	3
18	Mother's Day	3.06	18	Mother's Day	2.82

アメリカにおけるトイレでの驚きの経験談をジェスチャーを交え、楽しく伝えたことで好評を得たようである（高い興味深さ）が、この話は単なる表面上の知識としてしか役立たず、異文化の人との対人関係でも外国滞在するにしても、学習者にとって有効なものであるとは考えなかった（低い学習志向）ことのようにだ。つまり、この話は英語学習との関連性が薄いと生徒は受けとっているのである。「Senior/Junior」という教材に関して述べると、興味深さは低いが、興味深いと思っている学習者は学習志向にも高い位置づけをしている。全体的に見て、学習者の意識変容の中で学習意欲度に関しては、大きく次の題材が意欲を高めると考えられる。

- 1) 比較文化的視点を取り入れた話題性があると思われたトピック  
(Animal Cries, Rainbow-Sense of colors, Senior/Junior etc.)
- 2) 異文化の人との接触やコミュニケーションをする上で有効と言えそうなトピック  
(Cartoon-Personal Questions, Party, Apology etc.)

#### 4. 結論

今回の調査及び実践から以下のことが言える。

- 1) 学習者が英語教育において文化学習が有効であると認識している。つまり、英語が好き・嫌いにかかわらず、文化学習は役に立つと学習者は考えている。
- 2) 文化学習を導入した授業実践では、興味深いと学習者が考える題材は学習意欲を高める傾向がある。
- 3) 文化学習の有効性は、その内容と教師の提示方法・姿勢に左右されやすい。

上記したように、学習志向的文化学習が更なる英語学習や異文化理解の奥深い学習へと学習者を促すための第一の段階 (rudimentary stage) と位置づけられる。つまり、学習者により深い英語学習への関わりを持たせ、外国語教育における発展的文化学習を深めさせていくためにも、文化学習の中の学習志向的側面 (Attitudinal Aspect) の意義は大きいと考える。

今後の研究においては、実施した事前アンケートと事後アンケートを比較して、実際に文化学習の導入が生徒の英語学習の意識にどのような具体的影響を与えたのかを考察していきたい。

## NOTES

- 1 広島大学英語教育研究室によって行われた、全国的な規模の高校生の英語学習意識に対する調査結果の中から、関係する幾つかの点を列挙すると以下の通りである。
  - 1) 英語学習の必要性や、意欲、興味に関しては過半数の生徒が好意的態度を持っている。しかし、英語学習が「楽しい」「おもしろい」「好きだ」という意見は全体の3分の1に満たない。
  - 2) 英語に対する非好意的態度は増加しつつある。
  - 3) 英語学習に特に高い関心を示す生徒は学習意欲も旺盛で、自分の将来や、国際社会等も念頭において学習していることが多い。逆に、全く関心を示していない生徒は、気力もなく、あきらめムードが見られる。
- 2 羽鳥・松畑(1980)の調査において「英語を学ぶと同時に、英米文化の風俗、文化などを学びたいと思いますか」という質問項目に対して、英語の好きなグループで7割強の学習者が、英語が嫌いなグループでは6割近くが、英語学習の中で文化学習を希望している。本当に嫌いなグループでも外国語学習の中で文化学習を希望しているという事実がある。

## REFERENCES

- 井出祥子 1972. 「題材と表現形式」『現代英語教育』10月号 15-17
- 伊藤元雄 1992. 「異文化理解教材をどう扱うか」『現代英語教育』9月号 12-19
- 伊原 巧 1988. 「異文化の指導について」『中部地区英語教育学会紀要』18, 85-90
- 大谷泰照 1990. 「英語教師と「比較文化」」『英語教育』1月号 10-12
- 岡部朗一 1992. 「異文化理解と英語教育」『現代英語教育』9月号 8-11
- 北尾謙治 1979. 「米国の外国語教育における文化教授 <その1>」『中部地区英語教育学会紀要』9, 10-25
- 工藤幸代 1994. 「英語の授業をもっとおもしろく!」『中国地区英語教育学会研究紀要』24, 177-181
- 久保田泰夫 1988. 「ロージャーウィリアムズの「アメリカ現地語案内」に見られる異文化理解」『中部地区英語教育学会研究紀要』18, 91-97
- 坂本寿志 1993. 「歌を用いた英語の授業」『英語と英語教育』高橋・五十嵐両先生退官記念論文集刊行会 207-217
- 田崎清忠 1990. 「英語会話教育理論」大修館
- 中村 敬 1977. 「Cultural Approach 論 - 学校における英語教育の役割を問う」『現代英語教育』3月号 2-4 & 10
- 西田ひろ子 1990. 「英語教師に求められる「比較文化」の視点」『英語教育』1月号 13-15
- 除川芳郎 1992. 「人間理解教育の一環として」『現代英語教育』9月号 21-22
- 萩野俊哉 1996. 「マンガで学ぶ文化の違い」『英語教育事典』44-47 アルク
- 服部孝彦 1987. 「高校での異文化理解の指導」『現代英語教育』9月号 12-14
- 羽鳥博愛・松畑照一 1980. 「学習者中心の英語教育」大修館
- 広島大学英語教育研究会 1989. 「英語の意識調査(3)」『英語教育研究』32, 71-126
- 深澤清治他 1992. 「異文化理解・異文化コミュニケーションを目指した英語教育」『英語教育』9月増刊号 63-83
- 深澤清治 1980. 「文化的題材と学習者の興味に関する一考察」『中国地区英語教育学会研究紀要』10, 11-15
- 1994. 「比較文化の視点から見た教材と指導法」『中国地区英語教育学会研究紀要』23, 281-288
- 古川尚子 1993. 「国際理解教育の促進」『英語教育別冊 21世紀に向けての英語教育』大学英語教育学会内英語教育実態調査研究会編著 56-63 大修館
- 松本育也 1987. 「異文化理解の必要性」『現代英語教育』9月号 15-17
- 三浦省五 編 1983. 「英語の学習意欲」大修館



- 森住 衛 1987. 「望まれる英語の文化・背景知識」『英語教育』4月号 25-27
- 和田 稔 1990. 「新学習指導要領がめざす国際理解教育」『英語教育』4月号 8-10
- 1996. 「投げ込みアクティビティの基本的な考え方、活用の仕方」『英語教育事典』38-39 アルク
- Beebe, L., Takahashi, T. & Uliss-Weltz, R. 1990. Pragmatic transfer in ESL refusal. In Scarcella, R. et al. 1990. 55-73.
- Blum-Lulka, S. & Olshtain, E. 1984. Requests and apologies: a cross-cultural study of speech act realization patterns (CCSARP). *Applied Linguistics.*, 5, 3, 196-213.
- Cohen, A. & Olshtain, E. 1981. Developing a measure of sociocultural competence: the case of apology. *Language Learning.*, 31, 1, 113-134.
- Ellis, R. 1991. Communicative Competence and the Japanese Learner. *JALT Journal.*, 13, 2, 103-129.
- Kerl, D. 1994. The Case of LANDESKUNDE: A Vicious Circle? In *Culture and Language Learning in Higher Education* edited by Michael Byram. Multilingual Matters. 5-9.
- Klayman, N. E. 1976. Teaching Culture in English to Motivate Foreign Language Study. *Foreign Language Annals.*, 9, 2, 289-293.
- Kramsch, C. 1993. *Context and Culture in Language Teaching*. Oxford University Press.
- Kramer, J. 1994. Cultural Studies in English Studies: A German Perspective. In *Culture and Language Learning in Higher Education* edited by Michael Byram. Multilingual Matters.
- Lewald, H. E. 1974. Theory and Practice in Culture Teaching on the Second-Year Level in French and Spanish. *Foreign Language Annals.*, 7, 6, 660-667.
- Politzer, R. 1959. Developing Cultural Understanding through Foreign Language Study. *Reports of the Fifth Annual Round Table Meeting on Linguistics and Language Teaching*. Georgetown University Press.
- Rivers, W. M. 1981. *Cultural Foreign-Language Skills*. The University of Chicago Press.
- Robinson, G. L. N. 1985. *Crosscultural Understanding*. New York: Prentice Hall.
- Scarcella, R. et al. eds. 1990. *Developing Communicative Competence in a Second Language*. Newbury House Publishers.
- Smith, L. E. 1981. English as an International Language. 『名古屋学院大学外国語教育紀要』3, 27-32.
- Tamalin, B. & Stempleski, S. 1993. *Cultural Awareness*. Oxford University Press.
- Tuttle, H. G. et al. 1979. Effects of Cultural Presentations on Attitudes of Foreign Language Students. *The Modern Language Journal.*, 63, 4, 177-182.
- Wallach, M. K. 1973. Cross-Cultural Education and Motivational Aspects of Foreign Language Study. *Foreign Language Annals.*, 6, 4, 465-468.
- Wolfson, N. 1981. Compliments in cross-cultural perspective. *TESOL Q.*, 15, 2, 117-124.

## Appendix 1

### <英語異文化意識調査>

1. 英語の勉強（学習）は好きですか。
  1. とても好き 2. 好きな方 3. どちらでもない 4. 嫌いな方 5. とても嫌い
2. あなたにとって英語の勉強は将来役に立つと思いますか。
  1. とても思う 2. 思う 3. どちらでもない 4. あまり思わない 5. 全く思わない
3. 役に立つ（役に立たない）と思う、その理由は何ですか。
4. 英語の授業の中で、日本と違うアメリカ、イギリスの風俗、生活習慣など異なる文化に関することを学びたいと思いますか。
  1. とても希望する 2. 希望する 3. どちらでもない 4. 希望しない 5. 全く希望しない
5. 4.の質問に関して、それを希望する（希望しない）その理由は何ですか。
6. 英語の授業の中で、日本近隣のアジア諸国（中国、韓国、タイ、マレーシアなど）の風俗、生活習慣など異なる文化に関することを学びたいと思いますか。
  1. とても希望する 2. 希望する 3. どちらでもない 4. 希望しない 5. 全く希望しない
7. 6.の質問に関して、それを希望する（希望しない）理由は何ですか。
8. 英語の授業の中で、外国の習慣や文化を学習したこと、学習することは、将来 自分に役に立つと思いますか。
  1. とても役に立つ 2. 役に立つ 3. どちらでもない 4. 役に立たない 5. 全く役に立たない
9. 役に立つ（役に立たない）と思うのは何故ですか。その理由を書いてください。

## Appendix 2 (Procedure of Cartoon)

1. Explain the characters on the cartoon. (They are an American and a Japanese.)
2. Let students read the four-frame cartoon.
3. Ask them the following questions and let them think about them.
  - 1) Where are they?
  - 2) Did Mr. Matsuda know Mr. Ford before?
  - 3) In the fourth frame Mr. Matsuda seems to be angry. How is that?
4. Interact with students about the questions.
5. Here is in the U.S. There are several strange things in the cartoon. What are they?  
Let students think and try to answer.
6. Explain in detail.

## Appendix 3

<今日の授業に関して> 1年 ( ) 組 ( ) 番 名前 ( )

書くときには、自分自身の感想で、5 (とてもそう思う)、4 (そう思う)、3 (どちらでもない)、2 (そう思わない)、1 (全くそう思わない) の中で該当するところに○をつけてください。

1. ジェスチャーに関する話は興味深いものでしたか。 5 4 3 2 1
2. ジェスチャーの話は英語の勉強 (学習) をやる気にさせるものだと思いますか。 5 4 3 2 1
3. ジェスチャーに関する話・質問の英語はよくわかりましたか。 5 4 3 2 1
4. 今日の授業のやり方はわかりやすかったですか。 5 4 3 2 1
5. 今日の授業で一番自分にとって役に立った (興味深かった) と思うことは何ですか。

## Appendix 4

Learners' Interesting Topics

	5	4	3	2	1
Contact	1	11	19	2	0
Gesture	1	10	20	3	0
Rainbow	4	18	11	2	0
Mother's Day	0	10	16	8	0
Pictures	3	18	9	1	3
School lunch	0	16	11	2	1
Compliments	1	19	10	2	0
Cartoon	6	12	11	3	1
Senior/junior	2	12	15	2	1
Dating	4	9	17	4	0
House Tour	2	20	9	1	0
Apology	6	15	8	1	1
Toilet	7	22	3	1	0
Souvenirs	2	18	10	1	0
American Dream	2	9	14	5	0
Japanese Tourists	3	10	12	3	0
Animal Cries	10	10	10	1	0
Party	8	12	11	0	0

Learners' Motivational Topics

	5	4	3	2	1
Contact	0	9	20	4	0
Gesture	0	6	25	3	0
Rainbow	3	10	19	3	0
Mother's Day	0	6	17	10	1
Pictures	0	10	18	6	0
School lunch	0	6	18	6	0
Compliments	0	11	17	4	0
Cartoon	4	9	15	4	1
Senior/junior	3	11	14	3	1
Dating	1	11	16	5	1
House Tour	2	9	17	3	1
Apology	3	8	17	3	0
Toilet	1	8	24	0	0
Souvenirs	3	9	15	4	0
American Dream	1	7	18	4	0
Japanese Tourists	0	8	15	5	0
Animal Cries	5	7	18	1	0
Party	1	14	16	0	0